

エルンテ島の悲劇（執筆中）

ひゅう

謝辞

この物語はスーパーファミコンのゲーム『タクティクスオウガ』に影響をうけて作ったものです。設定や言い回しなどが似ているところが多々見受けられます。上記ゲームへの最大級のリスペクトとして書いたものであり、ゲームを否定するものでも、屈辱するものでもありませんッ！

「では、王はこの荘園の権利がディングル家にある、とおっしゃるのですね」

騎士のロギウムは、その鋭い眼光を王に向け、冷静に言い放った。ライヒ・ディングルは腕を組んだまま、微動だにしない。

王は上座に座っているものの、王の権威がこれほどまでに失落したものかと自らを嘲った。

「うむ。申し立ての通りだ。シュラクト地域の荘園はディングル家が所有の権利を有する」

「王のお考えはよく理解しました」

ロギウムは口髭をつまみながら、目は王をとらえて離さない。

それを見たディングルは、肩をふるわせ、小さな息を漏らした。

ディングルは、やがて大きな声で笑い始めた。

「騎士さんよ！ 王は、武装勢力の時代は終わったと告げられている。その意味が本当にわかったのか！」

挑発するような冷笑とともにようやくディングルは言葉を発した。

「ライヒ様、お言葉がすぎますぞ」

王の使用人兼秘書であるエムリクが口を挟む。

「うるさい、ハエ男が！」

ディングルは悪態をつく。

ロギウムが右の拳で机を叩き付け、大きな音がした。

「では王、この城の運営は今後、どうなさるおつもりなのですか？」

彼は可能な限り冷静に訪ねた。

「それについては、エムリクから説明させよう」

「御意でございます」

エムリクは手元の資料をたどたどしく、指に唾をつけながらめくると、一度咳払いをした。

「シュラクト地域を手放すことは誠に遺憾ではありますが、もともと文芸の盛んな地域のため、これ以上の収入の増加は見込めません、よって、その他の地域の収入の増加を検討しています」

「まさか、“大陸”を利用しようってわけではあるまいな」

「いいえ、エルンテ島は経済封鎖されています」

「それは承知している」

「大陸を利用できる状況ではありません」

「では、訪ねるが、南港に大陸の物と思われる船が三日ほど前に寄港していたが、あれはなにか？」

ロギウムは全員を見渡しながらかう言うと、エムリクを見た。

エムリクは狼狽している様子だったが、平生を装い「そのような報告は受けておりません」と短く言った。

「王はご存知ないのですか」

ロギウムは引き下がらない。王は暫く黙っていたが、ため息をつくとき重い口を開いた。

「私も何も報告は聞いておらぬ。貴殿が見られたのは、エルンテ島の新型の船ではあるまいか？」

」

口髭をまた弄びながら騎士ロギウムは、王よりも大きなため息でその質問に答えた。

「なるほど、ではその件は私が見紛うたということにいたします。して、収入の増加というのは具体的に何を考えておられる？ エムリク殿」

「まず、セランベリーの畑の増大を検討しております」

エムリクは抑揚はないがしわがれた声でそう言った。

エムリクの計画では、セランベリーの春の収穫が終わった頃に麦の準備をはじめ、一部の土地は休閑地としてアルファルファなどで栄養を保持しつつ、改良品種を積極的に取り入れることにより、農産業自体の底上げと、休閑地を利用することによる作業の軽減を計ることになり、そこから酪農や食用家畜の飼育にも力を注ぐことができ、さらには新しい品種や改良を加えた農機具の開発などにも手を回すことができるだろうというような考えであった。もちろんこの考えにはある程度の裏付けがあり、論理的には実現可能と思われるところであった。しかしロギウムは農民の知的探究心や学力の低さについて言及し、しいては自己実現能力が見られないため間もなく頓挫するであろうことをほのめかした。

彼の王をじっくりと見つめるその瞳にかつての忠誠の色は褪せている。

部屋には・・・ロッテンホルツの丘で採れた小さな花が飾られている。

「ところで、ユリグラフはまだか」耐えかねたようにディングルがロギウムに尋ねる。

「ユリグラフは北ユイモール海近郊の偵察に向かわせているので夕刻まで戻らぬ」

「左様でございますか。では、荘園寄進の話題へと戻りましょう」ディングルがまた、厭味たっぷりに右眉だけを動かしながら王におどけて、丁重に申し付けた。

王は深いため息を漏らしながらも、寄進関係を整理した資料に目を通した。王はこの重苦しい雰囲気会議に終止符を打ちたかったが、整理すべき土地の権利や、なにかにつけてけしかけてくる貴族達に時間を取られ、もはやため息を漏らすだけでは収まりがつかないほどに苛立っていた。

そのとき会議室の扉が開き、議会の者たちが入室してきた。いよいよ会議の大詰めである。議会は貴族達の寄進関係の議題を完全に無視し、外交のことについて王に差し迫った。いまやセラン公国との国交回復は絶望的であり、このままでは大陸の戦争に巻き込まれる危険もやぶさかではないということを議会は恐れており、平和維持のためになにかしら対策を講じなければならない時期であることは明白だと主張した。

王に具体案はなかった。二世代以上もまえから大陸との交易を絶っており、島の貴族もセラン語を理解できる通訳もかなり耄碌しており、もはや役にたたない。島内の貴族と王族間の不和も問題ではあるが、それ以上に大陸の動向に不安を覚えていた。大陸では宗教をめぐる暴動が各地でおきており、大国が介入して小国はことごとくつぶされ、結局は公国や帝国によって独立を阻止されている。大国同士の衝突はいずれにしても避けられない状況であり、その戦争にエルンテ島が巻き込まれないという保証はどこにもなかった。なぜならば、エルンテ島は大陸のどの国も採用していない特殊な宗教を信仰していたからである。大陸にとっては「異教徒、断じて排すべし」という大義名分がある。ましてや、エルンテ島には十分な自然と文化があり、さらに、

南方へ進出する中継地としての利用価値がおおいにあるのである。

このようにさまざまな問題が随所で限界を迎えており、もはや取りつく島もない状況ではあるが、それを黙って見ているわけにもいかないと、議会は今更になって、大陸への強硬的な姿勢を改め、復縁をめざしているのだった。その手段とは、農業の強化による輸出物の準備と北側の港の閉鎖の解除にともなう漁業の再開である。もちろん、北側の海の警戒は怠惰にするわけにいかず、あたらしい砦を構えることにぬかりはなかった。

会議は以上のような内容で終結し、結局荘園寄進問題への明確な結論が出ないまま幕を閉じた。

エルンテ歴三百五十二年春の第二の月のことだった。

食事

エルンテ島に朝がくる。城の東側から朝日が差し込み、近頃は鳥達のさえずりが窓を開けずとも聞こえてくるようになった。見張りのための塔からは南東に広がるセランベリーの背の低い広葉樹が青々と色づいているのが見える。

城の朝は太陽が昇る前から始まっている。召使い達はいそいそと、目覚めの食卓のために野菜と肉の質素なスープと薪を暖炉にくべて丸く大きなパンを焼く。とれたての動物の乳でつくる新鮮なチーズを薄めにスライスして、パンと同じさらに乗せ、朝日が昇ると同時に食卓へと並べる。召使い達の仕事はまだまだ続き、城の掃除や洗濯物、動物達の世話などの多くを最小限の人数でこなす。今年は財政が芳しくないせいか、いつものスープに肉は入っておらず、王族や貴族といえども庶民と同じような食事を余儀なくされた。

食卓には宮廷音楽家が数名雇われており、エルンテに古くから伝わる民謡などをアレンジしたものが演奏されていた。

テーブルはエルンテや大陸などで一般的なオーク材を使用していて、食事のための部屋の雰囲気を引き締めていた。いすは鞣（なめ）した皮の張られたものが六脚用意されていた。朝食はいつも王族だけで摂ることに決まっている。

王が正面に座る。すぐ隣には妃が腰掛ける。二人には三人の子供がいた。一番下の息子以外は成人を迎えており、一番上の娘は結婚して、すでに子供を一人もうけている。イフェリという名でその意味は「美しい炎」である。イフェリの嫁ぎ先はエルンテの騎士ユリグラフの息子ユーライ・オルスト・ブランブルクであった。ユーライは父ユリグラフとともに、先日よりエルンテの偵察へと連日各地へ向かっており、城には今日の夕刻にしか戻らぬため、長女はその間しばらく王らと食事をともにしていた。次女は体調を壊し、食事は個別に部屋へと届けられた。

「イフェリよ。ユーライはどうじゃ。優しくしておるか」王は食前の小さな祈りの後、一口スープを飲んで、彼女に尋ねた。

「心配には及びませんわ、お父様。ユーライ様はいつもお優しく私への心遣いをしっかりとしてくれますわ」

王の娘イフェリは、そう言うと静かにパンを食べ始めた。彼女の肌は太陽にあてたら透けてしまうのではないかと思われるほど白く、その頬にはまだわずかにそばかすのあとも残っていた。母のサリューに似て、すらりとした体型で、なにごとそつなくこなしてしまうせいか、身のこなしも美しく見えた。貴族たちの間で流行しているデコレーション過剰の服を好まず、王族でありながら、簡素でなんの特徴もないようなドレスを普段から着ているが、それが逆にイフェリをいつまでも少女のように幼く、純真であるように見せた。

「なにかあったらすぐにわたしに言うのよ。この人に言ったって何一つ解決なんてできないんだから」王の横に腰掛けていたサリューが王への皮肉を込めて言った。いつもこの手の皮肉を彼女は言うのだが、本気なのか冗談なのかがわからない。

「そうですわね。お母様」イフェリが答える。

一瞬の沈黙が訪れたが、サリューがすかさず、王に鷹のことを尋ねた。エルンテの習わしとして貴族は鷹に狩りを教え込み、貴族たちで獲物の質を競う趣味があったのである。

「そうだな」と王は前置きをして思い出す仕草——左上を見つめる、をすると、
「私のヴィックルは、他の鷹と比べて少し小さいので、大会などでは大変不利なのだが、今回は健闘してくれた。優勝はできなかったものの、ヴィックルが今まで捕らえてきた獲物の中では最も大きなものだった。餌を変えてみたのがよかったのかもしれない」

「いままでどんな餌を？」

「ちいさくスライスしたミミズをやっていた」

「今度の餌は？」

「そのままのねずみをやった」

「——そう、あまり御食事中にはふさわしくない話題のようね」

「そのようだな」

王と王妃はお互いに目配せをしてあまりに下品な話題に笑いあった。

二人は息子のルイセに目を向ける。先ほどまで食事に同席していたことさえ忘れかけていたが、サリュウの斜向いに座って黙ってナイフとフォークを動かしている。

ルイセは王の一番下の子供で、まだ十代である。身の丈はすでにこの場にいる中で最も高いが、そばかすや銀色の髪がまだ若いことをありありと示していた。上に姉が二人もいることでおとなしくまじめで、野望や深い欲望に悩まされることなくこれまで育ってきた。まだ幼い間はときどき癩癩も起こしたが、今では立派な紳士の仲間入りもそう遠い未来ではないことがわかる。あまり口数の多くないルイセだったが、話をすると聡明であることが伺えたこともあり、王を継ぐ者としての資格は十分にあった。

「ルイセ、昨日はロッテンホルツにいていたようだな。剣士と剣術の訓練でもしていたのか？」

ロッテンホルツは、エルンテ北東に位置する小高い丘のある場所である。街からはそう遠くないので貴族や商人達が散歩にまわるちょうどいい場所になっている。城から向かうには馬を駆らなければならないほど、少し離れてはいるが、すぐに向かってかえってこられるほどの距離である。

「はい。腕の立つ在野の剣士がおり、その者と試合をしました。ロッテンホルツにはそのような腕利きの剣士がときどき集い、互いに腕を磨いている様子です。実戦とはまた違うのですが、軍人としても使えると思いました」

「ふむ。なるほど。してルイセの腕前はとうだったのだ」

「私は通算で五回戦い、そのうち三回勝つことができました。あとの二回はこの通り、腕を狙われ、負けてしまいました」

ルイセは左腕を少しまくってみせると、包帯を巻いた白い腕が見えた。

「まあ。なんということでしょう。大丈夫なのですか」

サリュウは大きく目と口をあげ、その口を手で覆って驚いてみせ、我が子の怪我に過保護なほどに心配した。

「大丈夫ですお母様。木刀での試合だったので切り傷ではありませんし、少し転んだものの……。確かに打たれたときは痛かったですが、この程度で痛がっているのは戦うことなどで

きません」

剣での試合は通常本物の剣で行われる。もちろん、大怪我もする。場合によっては死に至ることもある。今回木刀で行われたのは、ルイセが王族ということも配慮してのことだったが、本人がそれと知ると自尊心が損なわれるため、剣士は「剣を忘れてきた」ということにして、怪我や惨事が起こらないように細心の注意のもと行われたのだった。

「本当の目的はなんだったのだ？ ルイセ」

王が唐突に尋ねた。確信に満ちた目線をルイセに向け、低い声で。答えはとうにわかっているが、言わせるためだけに投げかけられた質問だった。

ルイセが驚いたように目を見開いて王を見つめ返すと、その表情に冷酷で辛辣なものを読み取って、思わず目をそらした。「それは・・・」といったきりルイセが黙っているとイフェリが異様な雰囲気気がついてルイセに興味深く「何、何」と陽気な乙女どうしのうわさ話のように眉をひそめながら尋ねた。

王は答えを知っていた。ただ、若い頃の自分の性格のことを思い出しながら自分が同じことを知れば同じように行動しただろうと思うと尋ねずにはいられなかったのである。

「<赤い瞳の妖精>のことだな」念を押すように王はルイセを見て言う。

「はい。そうです父上」

「して、それは見つかったのか？」

「いいえ、まったくもって見つかりませんでした」

「<夜に出る>という噂だからな。今度夜に一緒にいってみるか」

王はからかうようにルイセに言うと、ルイセは赤面してうつむいた。

「あなた、あんまりですわ。それではルイセがかわいそうではありませんか」

王妃は彼をかばったが、王は譲らず、「そうもいうがな」と続けた。

「<赤い瞳の妖精>は魅惑の妖精で、彼女と目を合わせるだけで<至上の快樂>を得ることができる。同時に<快樂>のあとには<とろけるような退廃>が待っている。それも、血族全員にだ。そんなものを王族が手に入れてしまうと、まもなくこの島が滅びてしまうかもしれない。だから私はルイセを止めようと説得しているのだ。ルイセよ。そなたは<至上の快樂>のことは存じていよう。おそらくそれを目的としてロッテンホルツへと向かったのであろう。だが、考えてみたまえ。そなたは王族の血を引くもの。一瞬の快樂のために島の運命を破滅へと導いてしまうことは、あってはならない」

妖精の話は、神話のようでもあり、迷信のようでもあった。実際に妖精に会った者の話はまだ誰も聞いたことがないし、おそらく聞きようもないのである。エルンテ島にはこのような神話とも迷信ともつかないよもやま話は相当あった。島の唯一神<シュ>でさえも紛らわしい寓話が民間で語り継がれていた。

<赤い瞳の妖精>は、必ず<夜に出る>。手に乗るほどの小さな体を持ち、背中には透明な羽根を有している。肌は冬至の雪のように美しく、瞳は赤い。天使と違い直接<シュ>に仕えるわけではないが、<シュ>とは深い関わりをもって地上に舞い降りる。つまりは、天に存在するとされるあらゆる快樂を克明に把握しており、ちいさく愛らしい口からささやくように快樂へといざなうということだった。夜になるとロッテンホルツの丘にある、場違いな柳の木に舞い降りて、誰かが

来るのを待っている。

「しかし、父上」言い残したことがあるようにルイセは上目遣いで王を仰ぎ見た。

「もう二度と、迷信に耳を傾けるではないぞ」王は釘をさす。

「いえ、<とろけるような退廃>は存在しないのです」

「なんだって、この期に及んで何を言い出すか！」激昂する王。

「不思議な帽子をかぶった商人がそう言ったのです」

「そんなものはでっちあげだ。お前はたぶらかされているのだ」

王は激しく怒鳴りつけながらもどこか、言葉とは裏腹に視線を泳がせた。

「本当なのです。エルンテ島の伝記にも記されていると商人が言っていました。僕は、不審に思っ
て書庫にある伝記を見ました。伝記の・・・確か三巻に記載されていました」

伝記には【それが丘に向かひし者、闇を頼りに柳の元へ行きぬれば、突然、明るき光につつま
れり。かの人は、赤き目で男を見附け、ひらりと舞ひおりて曰く「噂事では我忌み嫌われども、
我と交わりし者は誠の仕合せを得たり」】とあった。妖精は自分自身で、幸福になると言い切っ
ている。しばらく読み進めるとたしかに、好奇心で丘までいった若い男は幸福を得ている。まし
てや家族も幸福になっているのであった。

「そうか。そこまで調べ上げたか。なかなかの者だな、ルイセよ」

もはや食事中ということのを忘れ、王は頭に血がのぼりきっているように歯を食いしばりなが
ら言った。

「だがな、ルイセ」王は続ける。「本当の<赤い瞳の妖精>のことを知っているか」勝ち誇ったよ
うに王はルイセを見つめる。

「いえ。本当の、というのはどういう意味でしょうか」

「本当の、というのはつまりこういうことだ」わざとらしく一息置いて「赤い恒星のことなん
だよ」と言った。

ルイセは言葉を失った。そんなはずはない、妖精は存在するはずだ。実際に見たという話を耳
にしたことだってあったのだ。

「ルイセよ。そなたは、この国の星座にまつわる伝説をしらないのか。この国には古くから星座
がある。現在は大陸からの影響で、ほとんどエルンテ古来のものは忘れ去られたが、文献にはち
ゃんと残っておる。<赤い瞳の妖精>はエルンテの星座なのだ」

「.....まさか.....そんな」

机の上のなにかに視線をおとしていたが、どこにも焦点があっていないようだ。しばらくその
ように呆然としたままでいるかとおもえば、突然立ち上がり、ルイセは部屋を辞した。サリュ
ーが引き止めたがそれを無視して大げさに扉を開けて、また大げさに扉を閉めて、どこかへいっ
てしまったのだった。

部屋には、おかしい空気を取り残された。娘達はきょとんと口を開けたまま、身動きが取れな
いようだった。サリューは王を咎めた。

王は深いため息を漏らすと、食事を片付ける合図を給仕たちに送った。

お茶の時間に、貴族達の懇親会、つまりサロンが広間で催されたが王は参加せずにエムリクと行政関係の書類に目を通した。国王の権限は実に幅広いようで、ただただ許可を下ろすことに徹する場合のなんと多いことか。ひと月の間中同じような書類にサインをし続け、腕を痛めたこともあるほどなのだ。兵士達の休暇願の書類が百通近くたまっていた。今日はそれに目を通すことにしていた。

エルンテの兵隊は優秀なことで大陸にも名を馳せていた。かつての同盟国であるセラン公国が皇帝だったときには何度も派遣し、その功績を認められた。彼らは平地において見事なまでの団結力と集中力をもって、華麗に任務をこなしたのである。

エムリクは書類をあらかじめ兵士の等級を分類してから王に渡した。現在の軍隊のやり方では「配属部隊別」で「名前別」となり、等級によって休暇日数に差をつけているこの軍事法ではあまり賢いやり方とは言えない。エムリクは書類を渡した後、手持ち無沙汰になるため、また別の書類に目を通し分類した。このような無機質な作業が延々と続くのである。

「エムリクよ」

王は書類に目を通しながら声をかける。

「いかがなされましたか」とエムリク。

「食事のときに、ルイセが<赤い瞳の妖精>のことを打ち明けた」

「左様でございますか」

「私は思わず、<古星座>のことだと伝えたが、そなたはどう思う」

「どう思うとおっしゃいますと、どのようなことでしょうか」

「つまり、そなたはあの妖精の逸話をどう『信じて』いるかということだ」

「なるほど、私めが意見を申し上げてよいのでしょうか」

エムリクはまた書類を「村人からの意見書」と「農業に関する書類」とに分類しながら小さな声でそう答えた。王は「かまわぬ」と言ってエムリクが意見を言うのを待った。

「手前の考えはですね」とエムリクは切り出した。エムリクは自分のことを謙遜して手前と言った。

「多くの文献には<実在説>がとられています。ルイセ様がおっしゃるように伝記の三巻にも記されています。しかし、あの丘から赤い星が認められることも事実であります。近頃の研究では恒星の温度によって星の見え方が違って来るようです。温度の高い方が青く、低いものは赤く見えるのだそうです。低いとはいっても暖炉やなんかの温度とは比べ物にならぬほどの高温です」

「結論を先に述べよ、エムリクよ」

「そうですね。手前の考えでは、おそらくどちらも本当の話なのではないかと思われま

「なんだと、それはどういうことだ」王はサインの手を止めて、エムリクの方を見た。

「エルンテ島の歴史はそれほど長くありません。王は六代目でございますね。大陸の歴史に比べればこの島は言ってしまうと新興国にすぎません」

「それがどうした、なにか関係があるのか」

しびれを切らして、ついにはペンを置いて、腕組みをして眉間にしわを寄せた。

「その間に編纂されてきた伝記も、いまだに整理されておらず、民間のものと学術的なものが混乱している状況です。よしんば、大陸からのよけいな噂や世迷い言までも輸入されている次第では当然のように真実はすりかわることが考えられます」

王は黙ってエムリクの話の聞いている。

「いま私めが整理してしまうと<実在説>は大陸の噂話、<古星座説>は学術的で政治的なもの、であると言えます。大陸の噂話と申しますのは影響力も大きく真実性もあるいは受け入れられやすい。あまり根拠のある話ではありませんが、手前の考えは以上のものであります」

エムリクは抑揚のない声で最後まで言い終えるとまた同じような調子で書類に目を通す。王は、合点がいったのかわからない曖昧な表情のまま、ペンを手に取りサインを続ける。

「うむ。私の考えとは違うようだな」

「左様で御座いますか」

「ここで争っても仕方があるまい。よくぞ意見を聞かせてくれた、有難い」

「いいえ滅相も御座いませぬ、王」

王がルイセに言い渡した事柄は大陸公式の神話であり、ルイセが信じた実在の精霊は世俗的なうわさ話であった。この構図は王が若かりし頃、先代の王に反発したのも同じような理由でだったのだ。だが今は逆の立場となり、我が子に「公的」な指導を行おうとしている。皮肉なはなしだ。王はそんなことに思い至りながら小さなため息を一つ漏らした。

この時期になると農作物の畑植えの準備が始まる。春の第二の月の満月のころ、畑を一度掘りかえし、種をまく前に土を肥やしておくためだ。城の守衛たちは、夕暮れ時になるとその風景の美しさに思わず見とれ、ぼんやりと眺めることもあった。

「誠に美しい、エルンテの誉れであるな」

突然背後から声が聞こえてきたと思えば、その主はベネディクト王であった。守衛は驚いて足を揃え、ぎこちなく敬礼をした。そしてしばらく何か一言を、と考えていたが何も思い浮かばず、城の外楼に立ちつくした。

「すこし、ここを眺めていてもよいか？」王は、守衛に尋ねた。彼は、一人にしてくれ、という意味だととらえ、城の中へと身をひそめた。

外楼からは畑を耕す農民たちがほんの小さな粒になって見える。畑は一度掘り返され、水分を含んで赤茶けた色に染まっている。彼らは畑植えまでの八日の間、生産をやめる。編み物をしてきた女性も、おもちゃをつくっていた男の子もすべて。エルンテの<シュ>への豊作の祈りのために多くの時間をさくのだ。したがって、市場はごく最小限のものしか扱わず、町が閑散とする時期である。

王は町と畑を交互に眺めながらまもなく始まる夕食まえの会議について考えた。大陸の東部で起きている紛争がエルンテ島に及ぼす影響について議論になると予想して、何か対策を考えねばならぬこと、春の第二の満月であるにもかかわらず王族や貴族は「会議」という生産をしていることについても話あう必要があった。また、未解決である領土の分割や相続にも話題が及ぶことがあると考えた。普段であればエムリクがそれらについていくぶんかの意見を参考にすが、王はこの美しい眺めを鑑賞しながら考えることもわるくないであろうと思い立ったのである。

前回の会議からはたったの一日しかたっていないことがとても信じられないほどゆっくりと時間が進む。

夕焼けに染まった広い空をいまひとたび眺めると、王は会議室へと向かった。

*

「ではこれより会議をはじめます」

議席がすべて埋まると王は開始の合図を述べる。

「まずは、先日の議題であった、土地譲渡についての話が未解決であったことから、これを始めることとする」

議席には王家のイフェリとルイセ、秘書のエムリク、ロギウム家から三名、ディングル家からも三名、騎士団から数名が参加した。

ディングル家の御曹司であるハイネは会議室を珍しそうに眺めていた。父親であるライヒとおなじつり上がった眉毛とブロンドの髪をもっている。詳しい年齢はわからないがルイセと年齢を同

じくする程度であろうことが漂う雰囲気から推測できる。

「ここが城の会議室か、チンケなもんだな」

吐き捨てるようにハイネは言った。

唐突にもほどがある言葉だが、ディングル家に見れば日常茶飯事であるためか、だれも咎めようとしなばかりか、それを増長させるようにふてくされた顔つきで王家を睨みつけていた。

「会議の意欲が削がれるゆえ、そのような言葉は自重いただきたい」

反論したのは騎士団のマルセル・イツァークである。マルセルはロッテンホルツの自警団の功績を認められ、騎士団へ入団した男である。

早くも不穏な空気が会議室を覆う。

土地譲渡の議題は、結局ディングル家の粘り勝ちといった様相で、想定していた土地のすべてをせしめることができたようであった。

「では次の議題、国際問題についてであるが——」王は少し言い留まって言葉を選ぶ。

「現在セラン公国は大規模な宗教戦争を繰り広げている。大陸北部はすべて公国の手に収まるかもしれない。フィクシリア王国は奮闘しているが、もはや虫の息だ。首都の陥落は免れているものの、ゲインズビヒは聖クレモンテ騎士団によって制圧されている。彼らには聖剣ファメラファムがある故、フィクシリアには歯が立たぬ。我々の立場はあくまで中立であるが、今後の戦況如何ではこの島も公国の手中になることも考えられる」

王は一気にまくしたてるように言ったが、内容はきわめて悲観的でどうしようもないものであった。

「それで、王には何か手だてはあるのかい？」ハイネは身分すらもわきまえぬ度胸で、王を指差して睨みつける。——誰も咎めようしない。

「軍事力を高める他に、北の港は封鎖するより詮無いと考える」と王。

その時であった。会議室を慌ただしくノックして、息を切らして現れた門番のシュリーゲルが、何事かわめいている。

「なんじゃ？ 何が起きた？」扉の近くに座っていた男が尋ねる。

「そ、それが——、ふ、舟が、き」そこで言葉が途切れる。

「落ち着かぬか。ゆるりと説明せよ」と王。

シュリーゲルは、息を整えるのに十分な時間をつかってから続きを話す事によると。

——フィクシリアの王がこの島に亡命してきたようです。

ということらしかった。

「いまどこに仰せられるのだ」

門番に詰め寄るが、門番のシュリーゲルはだまって首を振る。

「おいおい、どこにいるかくらいはわかるだろうよッ」ハイネはしびれをきらして立ち上がり、門番の胸ぐらをつかんだ。尚も門番は激しく首を横に振った。

「舟はどこで見つかったんだ？」

「み、南の港です」それだけいうと、門番はハイネの腕を睨みつけ、ようやくハイネは手を離

した。

「他に目撃情報はないのか」

「皆に一時待機したことを南部の農民が見たという情報はあります」

おかしな話であった。エルンテが北の港を閉鎖している情報をフィクシアの者が知っていようはずがないのである。また、舟だけで亡命うんぬんを判断するには早計である。結論としては、肝心の本人たちの姿が見えないので、待つより他なかった。

「とにかく捜索隊を派遣しろッ！ 訓練中の歩兵と騎兵を使っても良い。警備隊の内二名をユリグラフの部隊に遣わせて手分けして捜索するのだッ！」

王は早口でまくしたてるように言うとシュリーゲルはまた慌ただしく去っていった。王は自分が知らぬ間に立ち上がっていたことに気がつき、また席に着いた。会議の流れが途切れてしまった。誰もが亡命云々のことに気を取られひそひそと話を始める。ハイネは片方の眉毛を釣り上げて舌打ちを繰り返していた。

王は一度大きく咳払いをし「ともかく」と始め、続けた。

「亡命の件はまた議論をしなければなるまいが、先程のハイネ殿の質問に答えることが先決」

王がそこまで言うとテーブルから突然大きな音が聞こえた。ハイネが手を思い切り叩き付けた音だ。

「ふざけるな！ 今の門番の話の間かなかったのか！ 北の港を閉鎖してるってことが大陸にバレてるんだよ！ しかも、不国（フィクシア）の王が亡命っていう『大義名分』が公国の手に渡ったんだ、戦争にだってなりかねない。公国につくか不国につくか、どちらかを選ぶしかエルンテに未来はないんだよ！」

叫び声に近い大きながなり声でハイネは喚き散らしたが誰にも反論できなかった。マルセル一人を除いて。

「ハイネ殿の申される通り。如何にも我が国は危機に瀕しておる。しかし民は戦争を望むだろうか」

「優等生みたいな事を言って何になるッ」

犬のように狡猾な顔つきでハイネはマルセルに吠え立てる。先程からハイネの大きな声ばかりが響いているので、会議に参加した他の者たちはうんざりし始めた。

「わかったから少しは静かにしたらどうだハイネ」と隣の席に座っているライヒがハイネの肩を軽く叩くとハイネはそれを払い除け「親父はだまってるッ！」とまた大声をだす始末。